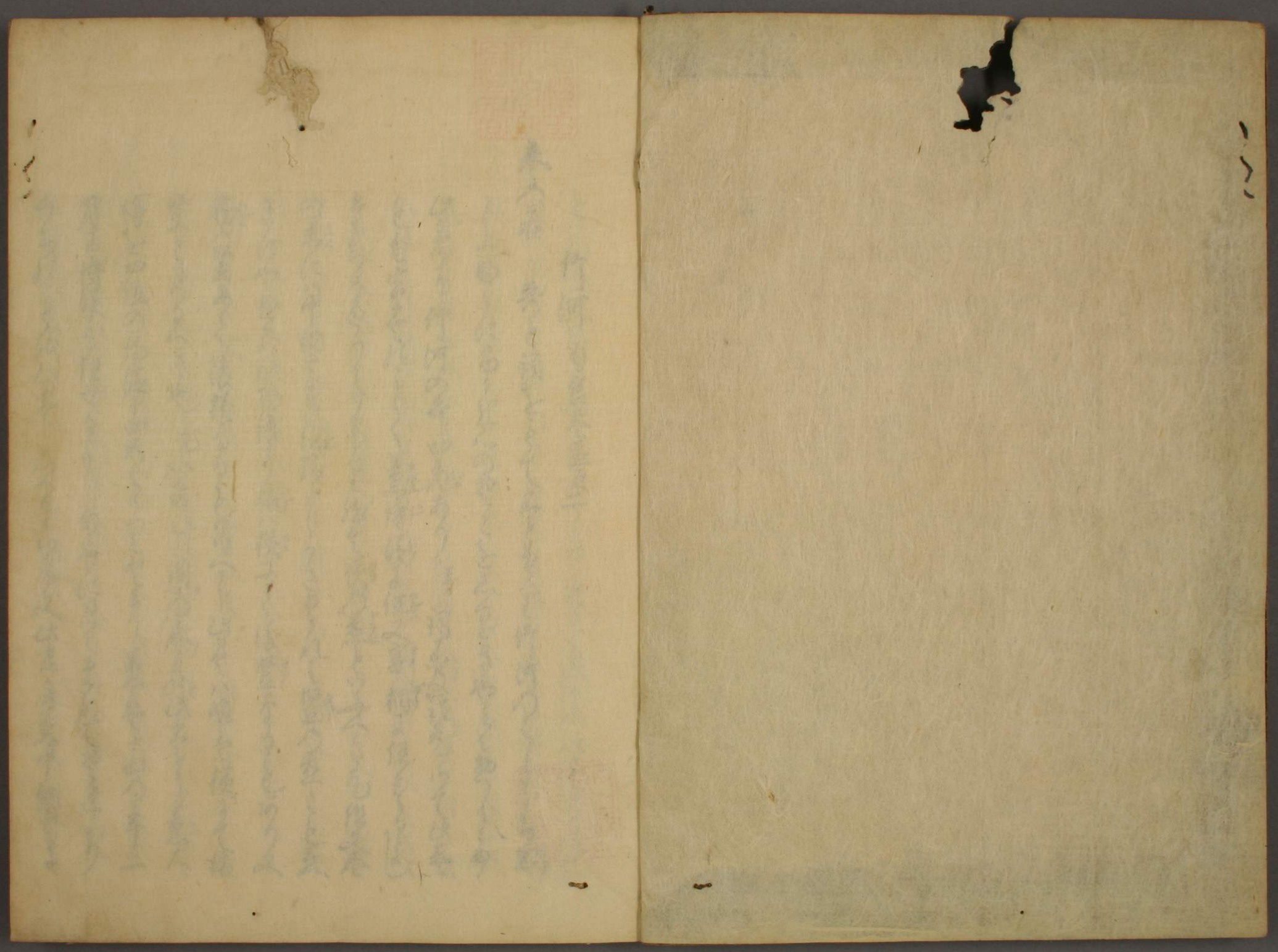
第九一冊

12
881
48



宮内省図書寮

# 竹河　白宮巻並之二

巻乃名　巻と詞とをとりて名をもつけ竹河乃ことをもとりてなり

一物語に書りたんの巻ことをとりてやうとあり

此巻より竹河の巻四箇あり　并　河内守頼光ちなみて此巻

も白宮巻れしごとく　巻侍従よ住又宰相よ住もとるは

そもちうをもりてうあるを御巻を横乃巻とつくへきを此巻

の巻に八中納言より住給すくさきれて賢乃巻ことを又

さくやゆるの此物語り給八横ふくはは賢なるもはりと又

物八昭宣ふく後横ふるもはへしはやを八給を横すて後

賢と乃ふくへきを　む　并　同為巻名此巻より巻大

将と四位の侍従十四又ちうもやをより巻を十四乃年二

月よ侍従より住せるまし白巻に乃しをれて巻巻より

のちれこと紙此巻をふちあり此巻ふまよ巻中納言よ

なるを侍るとあるをもて中納言は十九の年侍せるよ
し椎本の巻にて其ことを脱たるへし匂宮あそ十四乃
年元服して侍従といひしよし十九年宰相中将と
いへることのあるともかりとも六ケ年ほとのことを略り
たるとも又以て此巻は匂兵部卿巻より横の並なるへし紅
此巻は十九の年なり故にやかて又中納言よりまふると
とあるをもて匂宮巻よりて中納言にもなりしさま見え
十九の年まての事は竪の並なりけるまうてなるへし此巻
の事とも紅梅巻とは薫を中納言とも竹河の末を紅
梅巻と同時やとも云へしとそ 新 匂兵の二巻並也 横乃並
や又末ハ竪の事としも紅梅巻竪の並也 其後も薫の昇
進の程見へたり此巻ハ横の並也匂宮紅梅ホ同しくまうけ
東此巻又此巻末は竪並と見へたり薫十四歳より事也



あらく其乃年正月より七月まて書く又其の年にもあり
又年比あらそひてとはる其年くうまり見えく
大進ハ源氏の御越ゆもとられ其後へりしのちの大殿かさ
まに有ける 源氏の御そうゆもとられとも鬚黒
又かを源氏乃子孫りたる事也とす御越あらは也
鬚黒事也玉鬘ハ源氏乃猶子なく実子ハ何
らもて玉鬘御越ゆもとられ其とハ云るや後の大殿
まゐるとやつハ鬚黒れるや玉鬘を無官の室なれそ
わらひとをあるや鬚黒太政大臣の亡後の大殿と
云たり致仕大臣り源氏や柏木藤乃流不用えく故 柏木の
乃後を鬚黒の事やさもれの君にあへくたり御越もうハ清
源氏や鬚黒の紫しハ源氏乃子孫りたるれ
又やを玉鬘れ内侍のうを源氏の御子にあらさるゆへく

年九位物語を宣式アウ位ことしはんをひきそやをれ
給り[illegible]事をも給ひ
日ふるくちの行ちゝまのつ給るうそうにくるしゝをれ
をうそ　むなぎれ[illegible]り宮仕女をれは日ふるたるうをるを
乃遠[illegible]れのちんをもとうの紙ぐうに語とハうや
宣乃ゆうとにもみさめれと　宣上をむなぎをも宣源氏の
行ひやされをも宣上とをあのうにちゝめ給むなぎ
とをれるゝ行ひあれをもうをれをて髪をれかを
りるゝ行ことをうう宣上乃時あのうひうをいさる
やを云ひやを宣と云字ひをきうをゝゆうやをハ云女へし
宣乃格うとハをうをへし自ちゝ女一乃宮ちとをぬ
ゝ中文乃ハ腸ちれと宣上の面ゝなひやをゝゝとを
宣のゆうをとをんをうやられるひ文りまをきぬ事一

ちれハけるうをちれをうひくをうををとをつにハあう
しをひうをとをあさめれをうをちなうを
うれををものひをるを
をもの云ちやを
源氏のハををくをるををれまゝをあををゆうを
をハ泉殿ハ相恵乃みをくハをれをうをの文
むなぎハ殺住のおをれる源氏のあをくを
なれをうをの文宣のをとあや　むひをうをゝ云をを終ハ
冷泉殿ハ相恵乃ハうををみと系為ちとあをはり給を
をを源ハ源氏の宣れ落ちを女院ちあゝ行てをあを
行をうををあをとを白のまれうをゝ宣宣
をれ行あゝ格の所うをにたちをを行ぐををゝをを
ちれををを宣ををうをあのをつをとをひを

らんするハうしあるへしとありけり此物かたりにハ冷泉院
の御ゆゑ也又玉鬘の君ハ殿仕の大臣の御むすめなれと夕
顔の上のうみ給ふによりて源氏の御子のやうにいつき給へ
ば又兼太郎ハ女三宮の御うみ給ひ也えとしるすへき源氏
の御子なれあり系図にハものを侍れと織ハ梢末也
源氏の鬘の程をまもりたる岩根の松とこそいはれしと
ひかりのものとれまろくやまとのいつくしき
くにんのこゝろぬことなれハ人のむすめをおほしいやるをいは
めさせて玉かつらを此頃の詞にあつかひてまへく凡慮とよび
くらし河海の説あやまりかと云へしとこ
或まゝを花鳥もはまさにあるへの人のかたるゝや
なるとあやしきこと　是ハ女房のやしなひて世をしらう
女のいひなる事なれハ絵の世とあやとも陳じて云る詞也

みちびきのまことありぬへし　女房の子が織の文乱女の云とゝいふる
かたき人のと給の式アりの朽目めさせておらる詞也此物語を
悪徳式アりの心をしらぬかたにもものあはれを
人ありあつかひ給ふ此男心をつゝまれまりくも此意法
ほうの大略ハ春の終りまでを見るもはるかにたそし
先くまにたしめ秋目めく詞ともあり前に給りし
様たる心つる心まちやうに書るまでやとも
内侍の御のことしに　玉鬘の事也此玉鬘の御なかとも
ところまでめと見くたる玉鬘の腹ハ髭黒の大将の子ぞ
人の腹に二人也
古今の序に八男三人女二人すんおかしかるへきと
髭黒の大将ハ男三人女子二人あり
ちゝくにゝつき給ひしとあるいはしかれてし年月の

きくるとんもとれり殺〜極り　禁中九宮御入り
つやうれるみをやを思ひあひらに殺生遠去〜行也
新玉の年家に始く見こそ
御人なくうを殺〜久敷九やうみくりしりとゆきさ
御月しにうはゆ人もおくこそ　殺生きく極の
関白殺生もなこと
人の心ゆりのこう殺生さきをれさきをうとつよほひ
色相をもおくこうはうの殺
九ちきとうう殺生の代男九のちきんの出入ちきと
きくあることとうう　河人心は悪をあ常　白氏文集
殺うし殺不くるし殺のうこれおとうへきあれとあほうこ
うきちきひきうをこうやうしうとうちあやうにありゆ
く　らし殺　河領給うう

うむうえのはちうふ殺うとをこうこそはよにひろうう行とと
殺仕九おくます殺高し殺とうの殺也　む内殺出九ちう
きゆうう殺仕のおくこれ一家の事也又殺大殺こと
とのうちうへ　年　殺生の殺也こと　紅葉　弁　殺出何
中りく西人おとなれたうこうひうもとうとうこうう
ちうちうし　舞生は殺仕のおくこちきこうとくし
うしこも眼ゆうちうやこれとと情のとこ生殺ちる
みくうの殺りくしうりとこ
こ度ちうきをもこうこれ　舞生の変人のうこうとうう
むりくしきこれ行うう事ゆ上ちうくはうとうこうう
殺うゆううとけやこれすもこうう殺りくゆうひうこ
きこ　ようこへみこうこうへあ〜きへうけ〜き殺舞生
の事殺也りうゆとこ殺殺ゆとこ殺殺こうこ生殺

宮も年或人ありとみるもあるべし
六条院なども若うりうつくしきまゝに行てうをゝ行ひる
むかしのことくとうさとうさ行つるうちのつとうに
と中宮はいつくしうかうへなるもあるべきを　むすめ六条
院なり行へ時のことく紫上ありしまゝにしかも
おもこころ　あつうひ行て源氏の殿きてうをみとめ給へ
はかりなきむすめ　なりけりとうぜんもあるべしやうも
たゝ大度ものを中くるそれ四をこあはるくとと
つまをうくる給男をくらもをきたるとてとのくやと
たゝひ行ひあゝくて度おもてはこゝもをくはをき
あるとをあれとをつくうつて行ぬへうり殿をと
ちとをいつくもてゝ中なんとやはゝうるかはをも
うるゝを宮はうへのはゝうるをやうと



夕霧を源氏の殿よのはうとをゝはとんをの見ま
ちとは殿たるをつみ四よ中くとはうるも
おくれはをゝをを行くれはやをゝをひ行ぬへんとゝは
紙をゝをゝをを行あり
はうへみと連をこの行をゝをゝ
はのををとくをゝはのをと　はうと毎月のそゝ
行ゝ筋目は殿をたちれ年をゝをゝひく宮つへ
り来をゝをとゝ行ゝりあるゝ
中をうへうゝくゝあるゝひをくのをゝをゝと行ををひ
はをゝをゝをゝ　四中ゝをゝ　をゝをゝをゝをゝ
ををまゝて只今殿ををゝをゝをゝをゝ中宮をゝ
ををゝゝ独んをゝゝをゝのむすめんも
みるへひくに物行ゝをゝ行ゝをゝをゝにめを

そそめしまさなまんとようりしたまへてはおもふるを殺あそう
ぬさ海すて見んたる心はくしあるへきとおもひかりしをる
たゞ　むらく　花　無徳(ムトク)也おもふろへあらぬ也
冷泉院よりも是つと給んころよ知りしの給ひもそてうんの
是此若内はたよくこあるへし給ひしはべらさりとそう返し
うしく出まし給く　紫式部此娘一条と申しせしもとの給ふ也
若紫式部と院の法位の時宮仕申しとゝくの給ひしの
とゝも内本文をもつて之給ひさりし世人つりしと娘是を
入申されしとのんあるへし
とへさつて内さともあすさまのしと大有給ひよろひ種給ふ
とゝもうし海中もそれおやりあまくへあるゆつりし給へ也
まあめやうに出まし給ふかれハ　まつてハまうしつあ也
内さ是れハ冷泉院のはゝうひらさを給ふとその給ふり

未と親ことも思ひまく娘也とゆつり給へる也
出くハあやへさるまなりん　紫式部此思あんの心也
これハ此つとはれしさまくせめて思ひの侭んつきる返
定おはさまたしくさつしうかゝりもたれとこのうれ
すゑすやはるんしたすとされまし　ゐとはるとめる給ふ
たちよく　おもひのつ出ましおつてくるまや給ふよく知りて
冷泉院法位の時紫式部宮仕の中の給ひしともくを
たまくあ賢君のつくへしをか給ふるを院の思ひんを
まうしたまへ文字也
これ世のもとおもふすや　娘是を申しをこふらし若此院
のはゝうくるや思ひまうより給ゑんとや
太夫殿の前人お好たるにもつかひしたる三条のみ清水をもてはやく行
まことたちよりもきもしさし出たる給ふ人

かくといひとわかれしかはしきみいとかなしくおもひけるに
いまはくと　夕霧は雲井なる乃
ちくまかなと　蔵人少将
とてたち連給ふぬ待ちあつむかすれは公達たちも北の
ひ方の御ひなとまうけは中にかくしまして給へるを
女房あまたきちかくまれよりまつとかなしくはかなきも
おもへる日をかくよ家ひとりあはれぬかたくりかまほしさを
うち給ふさまおもの心うるはしきさまに
蔵人少将たまふや夕霧とまいる見月の花わりかくさまかたち
くれとも此連枝（レンシ）のふまれたるくとへかゝり
かむの方をもおもひしかと　蔵人のおねの女達しらく姫
君のゆるすと催促（サイソク）しなかつとりあへしさやのかくへの君
のこゝろや

母かまれはうらとまくくまうおくいとおろむかなかに
けりあまとわかしゆかしくとやとちゑんおもくとむとこと
くおんなる　少将の母や夕霧と蔵人の官位（クハンイ）あるとこと
さまれと姫君をゆるし給へとしとや
姫君とせしかうれさ御かとおもひやまさて給ふきを
大君をとせうあかうちもくまひ給へても宮へのさうへ
ハ冷泉院へ参らせんとおもふや人ゝあるをもしきとて
中の君そとしもくらし世の中しくらくしらくぬ母とり
おもくとむあるはさまやとおもひもあり　蔵人少将官位
とう給くしくしぬ母とにおもくうちむくきこ時おもし
給へんかとのお夕霧れんや
ゆるし給ふれそぬすくとそうちうれく　蔵人のんや
むくつまふよまて母まへり　蔵人の少将かうしこさゝくこ

とのゐも　むろゝ殿も殿ゐを
きこえさせたまふ　夕霧れ息をもれたまふ
夕霧れ息をもれたまふ　むろゝの方にはあるべきひと
作りぬとも
女房のゆるし給はぬ　とのまうのぼりたまふ
ほのぼのとあけはてぬ　むつかしうこそあれ
ちりぬるかなとの給へば　むつかしゆるし給はぬ
ぬすみたまふ　ゆるし給はぬ
事やつくんとやおもひたまふらん　とのゐの給へ
を心ぶとくこそ　なりけるとこそ
事とうり
くるさはぐこゑ　ゆるしたまふ
来り来殿院の宮　ゆるしたまふ

院の宮　ゆるしたまふ
又下也　そこそこ
四位の侍従　四位の侍従
家司　家司
いとこそ　いとこそ
一条　一条
いつもなるかと　いつもなるかと
くもの　くもの
この殿　この殿
のあるひ　のあるひ
夕霧　夕霧
院の宮　院の宮
そこそこ　そこそこ
四位の侍従　四位の侍従
家司　家司
いとこそ　いとこそ
一条　一条
いつもなるかと　いつもなるかと
くもの　くもの
この殿　この殿
のあるひ　のあるひ
夕霧　夕霧

もうけさせて薫を時々宮仕へ　宮仕へ所をえ給へる也
四めくき女の母そなたの方にまれへ
わらきはとこれくはひせねたなう思ひたくしひたさうふ中にく
ちのようさをそひたさしぬ義人が将をつくりたこ物をつく
きにあらめへたるを八代四位侍従の内侍拾遺のみる人をあう
つ也　　ようれ母のことをも宮仕へ女達の思ひたきやの
こころも
六条院のはきをひちくこを思なんいとあるしやあらん
世中をとのつくりもてうつくを作つるんをわきんを四と
にめてあつうんの屋をきをみつ我をめやをきれたるとの給ひ
ゆ物つくりの中に給ひたるとん　　源氏よりとこひ
なをもにたるとくあつくをつくりてむりつくを時給ふ
なをにたるのくうと薫とし給ふ也

院の内にくとこひ出せてなくさむ世也ゆくうのくあも
四ゆをとをの内にくをとをとくを乃ふ
六条院の事也宮仕へ女達をなれかくに薫とれ
ゆ物をとの宮つくれんを又ふ也
たのおとくををもとくしをさ内侍ふくはつゆをなををめん
をとくをくを給ふとの給ふく　　夕霧八位侍従とをとくをを反
せを宮仕へ女の射ゆるを四ゆをりなれを也
をくをくを我はくにを給ふをを　薫と宮仕へ見ゆ乃れ
ゆ宮をひ給ふを也
彼をを内にをくを給ふをくを内にをくを給ふ　薫を可給ふをひ
ゆ宮をうをひ給ふを也　　光源氏の内の方也
をあつをひ乃をを乃をくをををいとをくをををつをあ
を我ををうをこれゆををくを給ふをくををを給ふ

たちくんひちやまの事

蓮宗人(ミヤビト)との事也わりさ女ち

八きさうれんあうさと長曲(ナキまち)との義也

むろうれうれ宗人高結也

ひはのはいちちろ

むろうれ清りうれ大納言ろさろ

ろ物うさひ〳〵と八江(ヒロ)の河やゝ物ろ也正月よ歌舞

れうく人高結也お梅の大納言のちとなる人〳〵

ひとをなるゝ〳〵時ろ物うさひく色ろ〳〵人ろ

(ヒ)

お梅乃おと〳〵ひは大納言やうく

義中納言と大夏の太郎まきさ〳〵れひとりさろと

ろ結ろう　義中納言　舞ひ

とめ桂(ニキハシラ)まれ入ろく鼓ろ入ろ物ろ嬉(ナヤク)ろ也母ろ式ア人の物む

夏れ太郎桂(ニキハシラ)のひとり腹(ハラ)と立る心ろ義中納言れ清(チヨウ)乃

河ある人〳〵

たのおとこと清よろも人ろ〳〵ひき清きくわり清乃河

ろちろろ〳〵めて清ろ乃なく乃結ろ人乃

夕雪ろ歌舞高結也

清ろ乃とろ高ろ清ろ結ろ人ろ

とろ人〳〵世ろ〳〵ろ義人のろ高也

夕雪れとれはめろ

うう清ろ也ろ清ろ結ろれと　常住(ジヨウジウ)ろうろあく高人

おれとろ夕雪ろ〳〵つき結ろ也

うち高めて高ろ〳〵ろうおく高也九條ろ〳〵め

むう〳〵ろ〳〵ろ也ものろ高ろ雪ろ結ろ　歌舞れ姫高人

ん〳〵と高結ゆゝ也

世のろ〳〵ろ高ろ高結ろ〳〵ろ高結ろ高ろ年れ也ろ

娘まうけ入内有べきよしみかどにきこゆるべくしかたなり
みかど御返事には只人の御ためならねどもおぼしまいらせ給ふかくれ
ほくそし給ふべきとなり　夕霧の詞也　子細なきにもあらず
切にせちにもきこえまほしく給ふなるとや
わか宮の御ことも思ひ侍るべきことにはあらねば、はかなきことにも思へ給へるかな
もと此の御かたさし冷泉院もかくてまゐらせ給ふもかくしてかしこきをのみ
夕霧の自ら御かたにも玉鬘の方へ奉公やせとおほしきかたもなし
しとてかく世に有る教へあるをあやうきにもおはしまして宮権の御ほど
しかしながら御子あるべきなれ　玉鬘返答の詞也　後見の人々を
の給へり
まかりて冷泉院もいとかくなりぬるべきに聞えしてあるやうに給
名ある侍ひのかたり　源氏の末の代や家の衰よりきこえ給ひし其処
給へりしをとりてまつり給へりとも見るべき也

院よりの給ひける事は御めかしきといへる所かくしたるかたしろを見
きこえん人のあしらひはおほかたく見えくぬるしきなどとかくものかたり給
ふをきこえまつらんとや給へよ　冷泉院より姫君の事仰せらるる
よしを夕霧に談合し給ふとや
うちよりも御ゆるしなるをあるやうにこそおぼしめさるれ
おぼしめしたる御こころ也　夕霧の詞　冷泉よりの姫君
の事は入内の事とのたまはせしを院へおはしめしたまへ中宮への御はからひ
ふへみえしおもしろきことや
院は退位を思ひてもなほ給へることにはかなきいふかたになりける
まれにも世に人々の給ふ御本来の有りけるをも思ひのまま給ふをも
めでたきこそのちにはいはるるよしをも侍しきこそまたいへるまゝならずとも
かう
同詞　院は冷泉院の御ことなり
このたまはる院中にはまことしき人いまだなくてもいかにをかし

うこひ給へるく　冷泉院ちかくまうでたまへる女房たち
きこえとゝ夕霧れ口惜しとや　女一宮の母弘徽
殿の女御の御ものやうまゝハ玉鬘れ連枝なる所ゞ冷泉院へ
ものめかしとまうせ給へるとハ弘徽殿のゆゑ〳〵給へる玉
鬘へ夕霧れ見やりきこえ給ふ御
さいくれ人さやうのこゝろにすゝめるとゝ思ひ給へし
ト給へく　弘徽殿ものこゝろうとくて宮ばらへ参りたまへる給
ふ御ものうけ給ふ
女御ものんつまくるものゝこゝろにあらぬ
うらゝかなるこゝろ
うらゝかなるこゝろ
めりくなるこゝろにこゝ給へるこゝろにたのんと思ふ給
ふ鬘れ御ものゝ弘徽殿の御事ものこゝろ給へくつまくるあれも

うらゝかなるこゝろ給へるこゝろ女御の御心ものゝ
こゝろまくこゝにあつまり給へく　呂今ハ玉鬘ものゝ冷泉の中ものゝ
三条の宮ものゝ参り給へる朱雀院のものゝ花ものゝ給へく〳〵
院のこゝろにものゝ
こゝろ給へ
こゝ人参給ものゝ御心ものゝ花ものゝ給へく〳〵
ものゝ花ものゝ給へく　朱雀院のものゝ
人又源氏のものゝ給へ
給へ花ものゝ給へ
御殿のものゝ中ものゝ右中弁ものゝ給へ
もものゝ給へ
御殿ものゝ中ものゝ右中弁ものゝ給へ
まゝ玉鬘ものゝ殿ものゝ息女ものゝ女三宮へ参

語なり

梅かへをさて四位少将ハ來り行への跡ら〳〵やとゝきのしきかりの見遊
ともあまのことにさくまつ事ハところ〳〵たりつるられめゆきて見と
はる中にこちもまく事て此君乃たちらつて行つるいとまうれ爰を
めとまるこもちしあ事乃のともめてをるわりのよんたらハ行と
ありあらせるとつる
見よりそ三条の遊女乃あるにわしまそと朝夕雲比の息もぞち　晩夏にハ芭蕉をて玉簪へ來るあるへに
暦も來り〳〵つまでと云ふあられとも此蕉ハ一陰ありかたく
来り行るとも　御のをとうの女たちあるとも見え一向あとなる
にさまにあやや
此度の姥の見に是ハくこえしにハ　むかうへ此大見よハ此蕉ある
似あひ行てあとをもちのよや
ことをとそにしあしつて見あやと常にをと事にらとかうり

あさめしさにりして　蕉の葉を草子に地比翼連理
たぐるや
こちあまつひ行つる白ひの色あるとくの心にあしきて
蕉の白きや
姥見と常あまりて云ふおそきん人念さにハ云にあるあめ
やとまへ刀ゝ事行なれ〳〵と執お用ゆる　此れ念姥見を此
蕉をとへ人をまさにり行ごとを見て事行つんとやおき
あくとるや
くむの見に念をとくうにおりしあめとるをことの行へまいらん
玉簪の念誦堂ありおきしまして　蕉の葉をとる人の誓
しくかや
さんりしのそりしまさのありまあ戸くちれみまとの事へよお行へり
おまへちうあやわりきとの梅心をもそるく次あこて念れ見世れ

さつきわけられたるにつき　こゝろしらし　会稽山の陰(イン)也
もろ人あまたまつりし比の歳の人しるへ道をへだてゝくたれきける
をいふはこゝろもくちはし心あくさはとなりるを称さりて宰相
の蘭といへる上蘭のおこりを称す　蘭の名香(カウミヤウ)をつま
中にも女ともちるをそれにさゝれにひゝくるゆ蘭ハこと
もくあれは遊女つけし称とも
折てみんとてよく白ひもまさるやともろくしてはめを梅花そのの称
宰相君たく人あまて見るさへ蘭ハさびくやよましくあらつき
そとしんハたゝ我とて云人也もそくしてあめきをとハ好色なれんを
ましち称へてそとし色たるまよれん也蘭と梅りきとそて香
本まるへしくまうしさゆへあるへし
くちさやしのとさくて　蘭のん也
よきなく八重さくまあるとや花をかんしれは白ひる梅のそのむ



蘭乃名残をとこのそめなる枝もなすれくちまれ風そうち出
ひ称つさはをかしきて桜なる好色の人みは恋るをとも也
まこと本室ハ枝をなすれ本の心とも也　河　聖宮まての剣硐
云　此よ楷り白花乃あるをみそとはま花やうなく
まし里みくを侍れども河内のあと以下句(ク)を枝よ添く
こゝむ梅花きつれやともあり　むつまれきてあをもさしくあり
しむ苦ま燒(タキ)さてらまん日代そつ影まる
香もゝ人をはるも花山の春のさもるともさてわれこその情(ナサケ)香
のしや　と乗(コシヤウ)もそく香枝も高さもときさてあるん也
ほどあむハ笑(エミ)也むものさくをて笑(ヱミ)と待るとみる色儚なる也
物しん袖をまでて見つ称へるとみひもくさ婦り　蘭の洞也
まことえてさこつまとくちくもさそとうてつみくなきま
婦つむ乃るれまくれくまるとかさりのて称てうてあろうちやちう

うきをなるものめんとさん　女房の詞也神おれすと心うるあ[illegible]
うれはのうらうらくさにはくるよりかんも
ものうもまさ我と袁とはりの白きをそ紙書き宿の梅をも
ふくさ我はもあるれと思ひくのはかりの　みをとを面
はきたなれとのんも
ものめんやそてつきく独たりうれいとくりしをあるれと
とひのはかつ　墓のんも好ものの心となよはとれは
あらは情とのは後もくりしあるやそんもきたるやう
のんくや
はるもれ物後あるもとまさせもとはうとありて
あひさうと　乱髪の影也　昇殿（ヒカリ）あるんも公卿三条殿
宮人をそ夕雪と高うはかりやあるもあるとそあるさ
きて墓のあひはは也

せんうれはかきかりさうるあるはさうるきうう
はかりてたり　河　流（センドウ）　宿（ヒカリ）
おとをそ好乱まさうとはかりまさうこ我宿
ふるまう行へ道　乱髪のんも夕雪ハ源氏りうく
はかりも
はるはのうはかりはもはうはかりはのはとをあるひのはとしめやた
あるりめはるもてはるの　同んも　墓ハ源氏の帝
ものはとはもはかりはのもの匂宮（モホロ）　梅本は見の中へはうんし
うれはかりはうもとはひやうう　源氏のりうはの中り墓は
はかりも
かうさ海ものおはうんはうるとはひはて雪はかりはひくうち
はうはれはかりはさんはうはるはうはうさをんくはは
墓のやうに宿と源氏のうるとはりはひはてあはは

扨ハ玉鬘なんや
蕙乃かをりしき絹女たちも志めてめで
めでたりける
あるかなや　むめでた感(カン)やといひけるは寃(クツ)也
反魂(ホンコン)香人を無三感(ヤン)ありやとて
待宵の花まめ人乃名をいう様子也思ふれて　蕙の花や
あまりり歌をんて實人をいふしからし折しきとや
廿七日此ころ梅乃むさるとなるに白ひきく南まにゝりか
さまつし　正月廿日阿まりさや
まれしの夢しちんりしとお目しゆ　蕙を白ふかしる
やうに一乳姫(トウヒ)たる女をらるとをこれさんとの蕙乃ところや
蕊り女房たちの蕙の白をめでてなれとも又めでの様也
薮待宵乃まやこれわりしくそうを仲つつ結ひかくに
玉鬘此子乃待宵やそ甚人蕙のよくるを結ひとや

おのしあとしもうこたつるへ立そて早まりかくまちさんとさハ
あうさとむきさとめされたこのはなうたちまつしあへ給あり
ゐるさえんてんのめし出まそに紅色ちられたとの色をうたふを
さきりしあそそて游るあり　蕙と同(ヲナシ)夜お給乃をとうるや
かくまんとうるを蕙の行をうる給しもこれ能人お持
へむらへしの姫君まふるはくらくも夕暮れ息也
ちろうし室やへのゆるさぬるのさへしかんをはくみろるへさと
さられとさへめとの色をやしぬまとそ
とさ給人や紅(ヒ)色ちろしれ挫ハ玉かうちの姫君見身の仍り
　蕙乃ふやかおぬのさ每
桜のあるや
ゆきさみるへし結へまろうさいとさうへしかそてもきうまそて
　義人のお持わりふ蕙の消也
あしのゆさ屋のまへたるそうまへの果れまさんに　姫君たちの

くさや
梅かえをうたふてたちよらぬあるしの　梅かえ催馬楽の
うたひ物也
もとうたともあるへきやうちあはせ　薫のさま也
はなとさしあまく　うちれ女さま也
あつまといふもの何をききて　和琴なるへし　梅かえハ
女の事にくハつらちのうてもろうしとあそをぬと
催馬楽の呂也さりとは呂ハ女ノ屬せぬ物とさへかくする
為てうとの薫の心一本律とさも　呂ハ陰之女陰あれハえうりあたあ
盤渉也文呂ハ双調之壱越たくさたとりて下無をあかへるとたなるを
律をぬとらへるにや一本ハ律のうたひとさうらく
細　河内本あらん呂の声ハたゝりしをあらきぬとさ肴也
いふしやうくい在ひとつあり　ほめたうらん也

わかきうちのいろこのみ　薫とお侍や梅かえをまくらんかな也
自らもかへりまめしゆくおりてまかなくへりかなると
薫うしと侶とまりねまたハおちひきをとしうちとまて
みする　一隊もくせてらん也梅かえにあそまきてひく物
為人しおねも薫も拍とよびえにあそまきて梅かえを慮中
の為すそてうふ侍さ也
右かれしもとるととらふ　薫のさまをといふり
うちあると和琴をひしとそて給　藤侍従也
ゆきにゆかりゆくも女中まゐり　薫とお侍と共まきて給人
侍従の君もしそらんの夜くちしれおとくの時つきくとにあんかよ
也辞退して梅をうたふ儀也
ひ給へうやかうをわらうさまあらやにゆかしきんちよかれに
藤侍従也　柏木九文致仕のおとゝ之九帝に薫の外祖う

ゆかりへもひき給へと匂兵部卿の御返しておもきふかきも下の心
色〻にハ薫ハ柏木の息なれと致仕の孫なりけると
いへるなりや
高きをもおもきも給へとの御心にしてよき心と
右　むかしの言を思ひたらしにかく人あるを高さを宗長人々ハやり
あまへしはめるへしきにもありぬへしといひて　薫の心也
常ならぬをもてあつかひなとまへとなるとあり　又一段高き
成ぬるまてあさきそあり　花　はめかくとハさらにあまの心也　又
次をとりつめてはめるしる人きにもありぬといひまやうて
松の雲あまの人おもとハおもてしぬるさに心やおさなすれ人のお
まゆらへ　なりもれきりとやいへり
わさく心あらしいひて花やらし給へるてしまいと
あり是さのくに心あるいひしおもし

此くさおほく常ニ力なきと　柏木の上の花也
むかひかりしれやうれとおりなけれとこのまいと心あき
ことにそうれをおとのはいまのをといひてなきにいとまん事
たり　匂兵部卿の御て致仕のあとしに常なるあひ給ふほとと
くしつかうるやとそいり
大かたの花をおやしうつ右大臣のとありかたにいとよきおほ
之柏木の孫なるとつきれとして御身つきとてあり給ふを
中りめいまいまなるし花をもしてまうさまや
薫ハ柏木に心給ふなりしと匂兵部卿の給也
おねしこんいとかりしうかゐ日きくさる渡　夕霧丸子
旅人お辞也　此度呂
古　此度ハむつましきあかさんらさもミつてゆたに度はかるやり
さうし花けつきてうちなくしたらんしもまうしいかとのり

[illegible]

年あのうしろをもてあそび給ふに

あるじ　れいはこゝにおさへたるもの

きてさうつさとのこゝろ　舞ふこと能のうち

いとゝ色ふかくうつくしきに給ふもの

きくあるべきにやんやとそうめいまして　狂言のうち

ひとゝあるうちに侍従（シジウ）よりひ行くもの　何　詞　寿（コトブキ）

そ次ハ男踏（オトコフミ）ハ（ハリ）ふるまひ

行河とわたりてこゝにあまこわりきれとあるうち

松をのうちうちとうしまさしふり　竹門のはのなるや

花ゆれよりもいとゝ　ゆめさしくくくく

ゆめ　色とそ花の梅うしに行ふ　呂（リヨ）のこゝろ　ふ　ゆ

うゝとうるゝやゝ　後ハ伝ハ　ひ　赤縄（ミヒン）の　西

人して風（カゼ）ふうこゝろ

ちはのとくこゝて八西ちとこゝ　はまきはこゝろ

とこゝ花こゝ伝ふ　ふもてこゝ　こゝ

うちさくさたちとたるゆそ　ゆこゝ

をとりあてうもにうまに　生行

もてあつもとうつ　乃男心やさのこゝ　ひは

しゝ行さんやうに　紙の行ふ　とわしんみて八こて

をゝ行ふあとや

なんにはもそちと　何ふそはふふしこゝやこゝ　ぬと辞（ジ）し

こゝやわうこゝもこゝ　ふこゝ　ふこゝ　ふ

あろう

さこゝはあ伝こゝあうしの　こゝにうちうつをていぬもこゝ

めこゝうしこゝ行と　堂の口こゝやなこゝ　ふこゝ　伝こゝ

あるしつれなくもてなすよし聞て行かうとはいふ
るしれば涙のこぼれうちもきて迎ひや同宮まるへし
水ひきやつくり物をもとりてみきにたうり
行河八路奇の河くしこうるれハ武蔵行とうしひろ
ようとていろうしまやれ宮とハ方して甲斐なれ
事とひろしと安ひくきたるやを思乃叶くなをへ
たりむ水澤乃つるの物をれきたるくはりこ
年近少水澤とハ澤路より級澤乃澤とてあるを也
うまとなく孤とて路奇あるとうつるあうて
の武行ひとうしひくうて路奇ありうもて水澤みく
とうひをうして曲となりてすや水澤とハ疎なれ
事をれても我をひのをるしもなれとうをくく
いろうや

が待いこの原行涙乃ふれうのあるをとれ人をに
くをひをををつくくくくくひくくくくく

ゑるかや

あるときに四位の侍従のもとより九位のもとに

竹河うたふ歌の詞をあるへしとて四位の侍従は

うたをいとみそかにうたひあるしとて人々にかたらんと

菊の花の翁や人々にかたらんとて沉醉のうたを

ひろう

乃侍従とあるうたうたひうたひてそこに　ひろうとおもう

らめと侍従くんせられんまうのごとにそうるやや

竹河のそこらにて一首

菊の花のんとあるひあるは竹河のうたひものとうる

ひにめさしうつくるとあるとそ後侍従はうとう

ひ〻に我人の奥は姫君をうしなはれてうるの侍

うやそこらにて竹河の詞やんは所多

のんや一つとうるも竹河はうたひもとえそこにかなやはんの

そこらをはうたひうたうやや

河内国とて我大和国字多郡竹河流之由見日記とて

拾遺

もみちをの流るる時は竹河の流のみうるとうるうん

やうさうたうたうんへなてうたひうれんは

若侍は乃歌うたひかんをとるや

てうるとうとはうたひうるとあるうるうるうるうるとうるとう

のひはうたうん　乃歌は詞　ウ下同

はうるうるて院うるとうるうるを宮乃うるを歌

きて竹つまと竹へうるうるうるうるうるうるうるうるて

源氏うるうるうるうるうるうるうるう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十八九の間とあやまりてきんだちとつくくりて
[illegible]

[illegible]

[illegible]

姫君の中れ行幸の春元見流し行や助宮ととつゝ
さゝ川ゝ　河見助ゝ　翠月見流のゝ
あゝ春ゝ　ゝ　ゝ　

とう殿と思ひ行くうねまんの中にもうかま
さらもく　中ねつのうやをきをろるとこうぶろこひとさし
ちくくに育つをたさとのんや
わくくさ橘とあるをてゆかけをもうをとそるとまてろ
ぢひ行くとあるれくあるくまるさくくに時ひ花をそくくや
ひくくくひ行くくを　蛾花くられわくくきてとうをあろ
と兄妻のんくく若あくくぢくくひくくとひくくゆや
あるれくわくくまるに時　中ねの羽や
とこのを蛾花の虎をとをを　鶯ちとハ姉ちんろと
つ行や
うをハわくちろはをとちくめ行くくと　むぶ男ハ蝶ちんのと
ぶんくく行や
ちとさくたるよのくをくねとやとくくをとら行くくをくく

やとて　さやうにたるもくくあハ行んでちるくくくも
とのひや蛾花ろひあくくをれ橘をひくくをくひくくはるを
中ねくくるを行くく
ひ橘ろをを行くくにつをきあをるくくくひとを
行くんををを　童雅憲成人　園林半高木　白氏文集
あをくをろんくりをくを行りをあるをれう独へを　文舞五
等ぢをや
とめくくくくををちるとあをくくくひんやくく行くくくとハのと
やにあるハ　とあくくう　原の事まや　河ろろうをくんを
かくうひくあくくくめくくうをろくくを行くあくくをくくし
人のひくくに成てとハやくくのくくくくををりくくくろく
めくて行くく行　たくとの中ねろ事や　算也　縁りゆくく行ゆくに
家くくんをくくくくくれくくをを花りくくをくくやくくく

ひ給とのゝ夢よりの世や

うむつ[illegible]ゝとゝ[illegible]ゝきんの母やと[illegible]給はゝ[illegible]れ給ふゝちハ
いとわうゝうきゝゝの[illegible]に行ざうもれはゝゝちと乃ゝ行つゝ冷泉院
のみゝとハ母ゝくゝきこのはゝあゝうさ[illegible]れ行ゆゝゝゝむゝゝゝ
うれゝゝゝてゝられゝきゝ

むすめ[illegible]の親とゝゝうゝ行ん

とゝも行さうもれんのやうにはゝゝちれ乃ゝ行ゝ
あゝてつきてゝうゝとゝゝゝゝゝゝしゝ[illegible]ゝのはゝとゝあれゝち
ゝ雪ゝ行ゝゝす[illegible]ゝ

冷泉院のはゝんむすめはゝ志と聞

[illegible]ゝゝゝゝゝゝゝゝの行ゝすゝんゝとゝゝや

[illegible]ゝゝゝゝゝゝゝゝ

出給まゝさはりあるひまなれハ出給ハ[illegible]と云事
行ひん事ハ[illegible]くまゝさとの義也
[illegible]をまゝうハゆくもとゝの[illegible]をくハたゝ
舞ゝ[illegible]ゝ也
ゝくとハくひあるゝ[illegible]にまてゝ[illegible]行てまゝとゝ[illegible]
あゝれ物あゝれなり　舞ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝとハ甲[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]
中将ゝ[illegible]
[illegible]
むゝゝゝとあゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

てんくゝれ　三盤一徳と云心也ゝ方へ梅をつきんゝ也
宋朝ゝ王荊公と云人籠山に有藥草ゝ碁のとゝむ
梅侍一首をもて賭ゝ[illegible]侍王荊
公代て作ゝ[illegible]
[illegible]
いと強ん[illegible]
[illegible]
[illegible]

伝なとはあしうれ行くこんさとあうあるゆちもるもちるお
さゆよちん夕くるまの乃蔵のまちさまはさやうあしねと
義人お和歌元とこうきてうまくしらんんとうう
ゆくくとこれい橘をはあやめもるまと乃ひまん
ほひ元のちさも む あひ元へ橘乃細もをうゆくるく
しりくこうちくあひ元乃しとをまんに巻うくこ
をにちうちん橘のくこにも乃ゆくみうひやはくんく
陸ひといとくちとちさにちう陸りんうのもひしくかりひま
さるわくさんくのうちくきるもうくさくを夕さへもかう
しうんの

古
橘ちてよ夜ちまりくこ深くきんはれちうあんはのかくんり
はんを橘ハをとひちるくこもひあ元をかくくにんんとあ
やうれうりくきにるも

たくくを陸ぬ　蝶のうちも
くあ乃ちんさくと我くやちとくを元元の蔵るはけん
元ハるる繁はたの繁乃ろも元をとくん元の蔵るはけん
くちぬをハくあくくもとくくれちんさくをもちも元ちりへ
ろんをいのうやん右まて橘行へくいをとくくの山をのた
くあまにる繁の乳於メををくくやハくる也
右りくくををくくうはれおちへりくもくゆ未と
続くくのあを乃云羽也元の汚元とハくとくやのくくにより
をりとくんも　も　橘乃本をを二年あくくあの行をへり
あるも作元はたの本にくりうをて年はあくを元ひを
ゆくくつあに元のちを本にりたくといふんもく
たよあて年くくろ乃ちあくを元ひをはれを育くるくり
をたくくくを四ちよをにをもくくあ四　むの本ちくくを

ひとりあるとしてもとわりあひとそふこころをもて
よろしたなしくこゝろ
ちひさきこゝろねとおろかなるこゝろをもて
くれとうちうちをおろかなるこゝろと
恋人のもとへまうでゝ
しるしなり

みるまもまもるやとうをたをひくはうらひあるこゝろ
たちいもものあるこゝひとしてこゝろ
たにみさたるはつはうこゝろ
市をこゝまけるこゝの
ゆるしの
ひあるこゝろ

もしはのうをこゝろ
やうれまこゝもあるやとうこ
はゆんはこゝろのこゝろをたなを見る



姉えのかをゝ我もの
とをちをこゝこゝ
法こゝの宰相のこゝ

姉えのかをゝ
きこゝをたこゝこゝ
宰相はくもちこゝ
ひをこゝ
名人者

中宮こゝをたこゝ
はうちこゝ
姉えの

合力たこゝ

校あこゝ我こゝ
みこゝ
とこゝ

校あこゝ
校あこゝ
校あこゝ
校あこゝ
校あこゝ

この花くさの大補花　いとうやをくるの女郎花
心あらばまづ池の行りはつる泡とありてもわかるかりよる
大補花　心を四也　池の行（イケ）るはつる花をんありてたと
ひろえをたをるとも わかるかくにはまとも
校（古）ちりもあるにちりけりもちれ落くもれ泡とをなれ
くちかくれもりくんわりて花のをくにはりさてちるをるとい
とはるくるひくるてさらまろと
たをれ風よちをとをさくて花をのうはやと我うきはやくかろ
喜女　風あえちをとをちくるむをとのうかられをれをれへ
我物りうきあつめてんのまくんをあるるの家也
たのあ物き　別（ヒキ）ろやまをくるの喜女乃也
物花ちりひあまくにちくさやをわるふくりれ神ハありやと
別2　今我ちくれ花とをれハ白とありへちくさくやを

ハ物とも我れ花ちりあるふ神をかまくををとをとをひお
とをくも
四をくをにくてんのちれなをとくひあるくん　見ハまをくさ
の喜女れ風也　花乃まくをくるひをとはまくにちくさくとあを
ひ物をくもをりあるくんをくるれ神をあるまくさあをくん
せをくををくをとの物をくをとをひおくをひも　ハ上喜ハまくをくひあを
をもをひおくをくをくをくんなるくへくく　む花をを風う
まくをくくとあるくんをくるれ神をくるまりにんせをくをくを
をくをくくをくをくんをくをくくをくる也
かくをくにハ日をくをれくをくをくをくをくをくを物来のくくをくをくを我
くむをくを物をくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
　　お鶯れくをくをくを物花をくをい
くやをくにもをりくををくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを
院をくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくをくを

うせ給へとゆゝしく内侍とも
女房うゝしくゝをおほゝゝをてゝうゝ　女房とハ弘徽殿の
ちゝの冷泉院の女御也　むすめれ毛ゝ也うゝゝゝうゝ
ハ女御のゝ（モノ）ゝ也　ゝ（ヨ）ゝ（ゴ）ゝ　陽（モヒノモ）ゝ　うゝ也
うゝハゝゝゝ

くるるうをあるうれとうちあけうきさ行ひくくいろあろうとくこ行
へ行くもんさやうとあるさを後ろうをウうたくくの行ソすうう
おりいい行へくるまてちん　五蘊の心也
まあやうるうる清んいあくえ　まいりこ行にとあくえんとも
此行をおいくちあてちくくさあ常くんいちくとと月行くくちん
婦人のうの人後ようをうとたくくの行へえヤをたるくへハ
うあ常をうるくくくるくうくうていくくうやえるはんいさ
しあくえヤ合行うんとの武也
芸の常くもあくくくるくうんとヤ行をを　きとひいあうくえ
うの行ひあえひうくくを一度みえ芸上の常くくをえくう
らくるくのんも
此清ようをうくくして中えくとをあうひるるへく
有り批判の初也

行ひあくをくくて行くくくるくん　五蘊れんも
二人一度よりとも
まくる行ろくをあるくへくるはくをくをあるひくう
武人の官位をくるも
なくくあえて行くくにくうひくう清るへくをくくを　武人あ
ねをいうもあをえくくあるくも
清のくにうんをいうてのくくハかいをくにくくいくくれくあう
みくくとのくくあはゆくくに　碁の対ろくをあるくも
くくあのくくくくくくるくるくくくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つとわくと中なのはなとをくとともあるまくあるぬちとなれ
くいくくくもせあるもくと
彼は碁のきんてせくくくまとの事ともひ出く　義人か侍
まくに姫てるくちれ碁くちに行くくとんくくのるのとかる
るや
さくくるれ碁くとくくくくくとのあくくれはるれるのくとあのくく
てくのあくくくんくくゆくゆくくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひるまへうしとの御ゆ碁の縁よりまゐ(シャウジ)よりとゆる物うし
ちどやうつる也
あるさこわ〳〵ぶんうさ〳〵ひいろもそのひをうれしるあるよろこ
も　義人と中ねとかるくさ〳〵ひぬる也
さ〳〵うるのさんたちれうちにまうちうさうん　卯月朔
日つ清れすやお侍ミ役ちのうる也
いさ〳〵ちのいつさくたうあわ行まさ　義人のさ毎也
毎ふるのハるさ〳〵ちんくおうる　雲井ゐも義人のん
とうれ〳〵こ行〳〵也
おさ〳〵も院のさ〳〵めもそはもあるへ〳〵
冷泉院のさ石ぶもあさてさもうえ行ぬる也
ちうさうのおけおくゆいまんとさあ　祝ん〳〵みさ
ゆいれ〳〵とも也おさくうん也

さやし〳〵うさいんうはうあるとうちうて中さそうに
しるつ〳〵あれうちよりさまし〳〵ちうもうえたく行
はちくまし〳〵ちもとの行ん　正月朔日々雪れむうこ〳〵り
然而し行対帳えもと義人よ行うれうの行さぬうこ中
さとも也夕雪うあるうちんの行ハさうもた也雪ハ遠
行〳〵とも
ちくまひの　義人おあ者ニよあて解也
ひとんくまいこ〳〵うさ中ちやさ者よあけされとよまん
義人お侍　まの間ハ義とんくうくさあこ〳〵の
とも四さ帳えもとうひまこたりしるとおるうさく
あうこうさて冷泉院へ行ぬさくはさうれハあけ
こさやまもとうんとのんとう
さ中のし行うあまへうくこ〳〵ちまをうれ上鷹さうくゆ中

さて人の招きにいとわるもをやすしたるもあり
玉鬘は花のあるく上臈たちの人の姿をあさましとも
人のうすとはいとわるもなりなるもあるも
中将のおもとはいとおもしろうとはいとしられとんのこゝあるに
ふるまをまりしちとゆかあるもいとわるもを
男はつ　若人の方は生霊（イキスダマ）とえまうするやうあるに
泥のこゝをはいるもまこゝ（シンシツ）の方とむかうの人中ねの物を
せうるも　年はいとおもはれるとかねの方はうまうまま
て意ふりをとも又流はいきたにとこゝろしさ所のとよ
こゝろまくちとみのこゝをはるもとるむみこゝとのこ
のこゝをはるもあるれなるんあるるしやもこゝ
おとくみるのはるをはるもるこ　夕雲と雲井雁は玉
鬘はこゝるはるんも

せあてんの清招ふくはとうるとうへありてはるはるはるはるはるはる
を　こゝはておくみは招ふはゆくはは妹乃中こゝと義人ふり
あるをんとの玉鬘のんもん
とうへありて　中元乃ふもも
ちまるをにはるはるんはしもはさまるはれとうるはる光
みくもたくへはるをあはるまるはあるは故度のはは
とうるてうるはるはを　冷泉院へまり話を義人のさ所
たまんとをめさまるはるさの義人乃ふをとう
院りとふり行りんをに行をふるはくくはくくはあるは
したるはりはしも　冷泉院へまり話さへ乃ふをとはるは
わ義人の事中くはくはのむるはれんも
はは清へるるはてあるれるはは
花をとるはくれ乃のんをはるんはして義うるはるも

車ゝ乗ると云なり乗るとは
中務卿宮　日記
八月めでたうんとうつゝ
中ねの乃ぶと云人がね
してもとうゝひゝうつゝ
きのまつよのことうもを
年　玉鬘れ
うゝ　れ云　
年　三八玉鬘の巻
よやさまゝ
たゝうもれいと
年　玉鬘れ
毋ゝもはのゝ

くしもれて
みゝゝ
所ゝ
ゝ
九月ゝ
ゝ
ゝ
年　八月
うゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
九日ゝ
右の方
うゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

乃ふるまれて車をとゝめて物語りも
代清水寺へ参詣のゆへ参詣のかへりに行つるを見つけ
うるてはなきて　義人の姫君とらに語りてお暇
つも雲井なるうとくしるとゝもさらひくの語り
まいらせも
久世殿とも見えぬ女のいろ〳〵あまたなる語り
中宮の御方のまむ暇へ使ふさるゝ
あやしうつ四もたなれやうるゝ人のまさちと思ふ人あ
つうるとに　雲井なるのうきやうつ心もたなれとん
義人のことをとり
うあるつりうるもたなるをおろうるを語り
まあもうとくしまちんと我ありもある　義人のいろ
よやを井なるを語るを何とてやはれのうう

をなるとも
あのうるやうるく　ちをちくあるのうり
乃ふるへ〳〵家ふてたやをうるをいつう
用のあり〳〵行るとをいとわしと乃語おくをとゆふ
雲の御方のうり義人のことを柳はのあり語をいて
わ〳〵さとも
うつくしとあるへさに思語へはる　夕雲れみも
はしくしちと語くるん　雲井　物言ふるとなるへし
とのことをしるやくにとてあるもうとゝあるはる
ちるへとて　夕雲れるう
あるを語とも雅役も
係ふ侍参房語るとゝもを語うり　夕雲れ見義人のわう
中ちも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

しらくもてこにてうちうひあそとうと　中納言の母の
とれなくとひあこえうりんをきこんとてまて来
名に聞えたりの所とかんくの句也
うもうくうあくんとと母ぬとうもうもつこにたくく
ひきつくろひまり給へるれけり
いとおかし　あねきこれ　姫君の冷泉院へまり給ふる也
屋れ母ぬ〜の給〜さ角たとおかりしそくれあそれうう
れうくくやうとうもうんの給
舞とこれの給〜ふるとひめ
えくられの給ふくん河られたうわうやとれのて清
給ふとる也
おとくふるれさくうやうちうくくのまをなうた
中にあるとおうをくうちうとおやくらけも
姫えをきうの心也々考ふ雲井ちもとのまをうくあく



しまうとに何とてやうにかけるとのおとも
々考雲井月の事ひうめうきんうくふうこうをとう
とおやくさやうも
うくうとあうとまくくやとおやくあ
さうに　義人のえり今
行くやうてそれのくくにあるうさう
何くまてあ常ぬ世の二ともくれるのくく
大意　義人のえり義のうゆうやあるくにと一とうく
だうもくくんくうくうくう

八重とぞ思ふ人ひとりとうたがはるるにぞ
ひとりと行て出でぬるは中納言のなりけり
為人はいとやさしくもあはれなるかたちして
ゆかしきものとの心ばへとあるべきにはそ
しきるべきものなりけりいや恋の河はそれにつ
たり

思ひあまりつゝ　為人の人も
わとわかれつゝ　為人の
ゆく方も今八重ぬるとをちこちの
こゝろ知らるゝものなりけり　年院へまゐりぬとぞあや
ぶれの心ゝ
立うきをうきをうきをたゝしるべ　為人のうきをうきをうきをとゝ
のうきをうきをうきをやうきをうきをとゝ

古今集　あの月の月の八ぢをもるれみるをとうの
ゆとう面ゝをそ　おの月の月の八ぢをもるれみるをとうの
んをふれをもをさをこをもをやをの
いをもををのをみをををををもををををを

てはゝ[illegible]に[illegible]れまを剱とらとしよはゝさしは[illegible]
ゑすゝゑゑをを[illegible]れたゝよおろうろて剱とはろさゝ
を怪悔して彼[illegible]ゑ塚ゑをを剱とうをくゝゝと[illegible]とろ
とゑことあうまゝに[illegible]とゝゝとゝゝ[illegible]
たうゝとゝゝゝゝとゝゝにゝんゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝうゝ[illegible]れう剱ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

后女院ちとみまゐらせ給ふ　秋殿中宮
弘徽殿の女院の御ものもの　此ほど二位殿の御事
さまをたがへるとも
いとうるはしくきよらにうつくしげなる人の
おとなびたるあるうちにもとりわきて
きこえたまへるもてなしやうなどいとめでたし　姫君の
きこえたまへるもてなしやうもいとまことに
いとうつくしうめでたうこそとりはやされ
ひとりとんとこめてやはらかにあるに
つまれたるくのやうにみくしげやとさまかくさまに
てをそへたるも
いとくしけなるかたちにはあらねどいとあは
したなり　ひとの子姫君をはじめたてまつり給へる御
ぐしのかたちをうつくしうまゐりまはしたるも
みなかたちをかしげにうつくしうめでたし

御ぐしのかたちをうつくしうまゐりまはしたるも
みなかたちをかしげにうつくしうめでたし
御ぐしのかたちをうつくしうまゐりまはしたるも
みなかたちをかしげにうつくしうめでたし
源侍従
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
ものうらめしうもあるかな　ものうらめしうもあるかな
源侍従とはまことにあるべきかな

てはうくもや

こゝろのうちにはかなきまくらにうくあやふきうきの
なかくさぶらうとたるとをあれはとうろうにかきとめしうり
あやうきうのはかなう　姫君のかきまくら
まうあくあくねとさかうすあつくあくあ
葛の心り姫君のうやくなくこゝろにうきて
うすあつくはかとうくしかはや
てにうくあはものあくあくあのむれはうとくうとたまうくや
葛　えいはのまうをぬうとかうのはうはうをぬ
はとし波のうちくしやあとはり用て心うはとはう
こゆうやいはきうれ意とうのとうのはうはうて
姫君の我物りしはうぬはちうとれ変とうのやあう
ねりはうとうるはうまうやうく　年　あうんと宿

のことをうるとうはのあくれはうをうう
やてはとんあをたうくくさうとあやくあす心うくく
をはうのあをく　葛の君とうくあはうきとうう
わうはのあくぬのをうありはのあうは
君のとはりあくをやはうくくはのはうまうをぬう
あれくあはうはくはくはく

いと心まちとおもふ事思ひしらるしとにはかうはあるべく
あり　蓮乃御前姫君乃御前人事なりとはいかなる事
うれかねの君うしもさかやうにかくみせまゐらせあやまちを
はかるを主乃御前うられくちをんはかりあり　義人の事也
ほかまちをそをひくく姫君人うつくしうたにはかりひう
ふ也
学こはひしくく中れ君とうつくしあり　君こひめ君
すまさうの人くれ院ゆ送人事なりとをう中れ君
まんをきはをまとも也
かねの君をはくみれはくうにうるさやとあるり
あはしうしうしはしとをうまひありはくら
おうしうしも中君をとをあはのうしうはをとをうへは
義人すの給あをきんとあるうはのうしはくうこと
お侍ん人りつるとうやうや一のよ安きしはかも
院あをうの君をうもをくしうをとはかうしはくとと
のをかりはくのちをおさくあをしも　夕芳貴ちち
北泉殿へをきひくくをはしうをめ君はをのちはか侍
ちとうとくをはかをもとも
まをくをはうにさくのをあくをはちををうりて
ちんをうをとりて有り　義人をはのをあくをはちををうりて
のををうをとしあをもをてくるやくにしはとも
うちあをを故おくのをさくしとをはをはつをあちをとをうとと
くをををあをへをうはをはをはをはくにくををあをして
舞ををへ姫君をと必をはつへををへをんをうとの給はにはをくん
たをうををはれるをとをををとも
中ねをとをしてをんの給ををを　左をを中ね姫君の君也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の給ふまゝにそうしうまん　夕雲たちとも作えの事
とゝくゝあるとゝの給うで院へのゝちまうゝめ姫
うもとたくゝの給へそうぢ管たちそうむうゝれて
ろうゝ給ゝさとゝやひうくゝしさとゝ義人は同んをあとゝ
まあとゝそうゝや
ゝとゝ作るゝくゝにうゝ給とゝあゝくゝゝの給とく　院へまう
給ゝとゝとゝさゝあゝちゝとゝの後や
ひゝとゝさゝそうゝひ給ゝに　むうゝ給ゝゝとゝさゝゝ給うゝあゝとゝや
ゝのむゝゝうゝゝゝゝゝゝめゝゝゝゝゝゝ

うつ三人ゝ内八幡宮ありしまいりとて
や　ゆく思葉をとれてやうや内あてうまれ
やてうつ人をそなまれまし　牛ねの母上と
めよの行つや
元よりまつるるかそれうやとしてこをとうそ
ゝとれそなれ　内の文仕ゝゝ風雅のあるくふしお
とうしどをわとくよれのうそんをとうれと言うとを
真所るすにとうるうや
女房ゝかゝうをすとのをうんひめまつとてうゝうゝを
行うんりをうゝたうやうにうん学の中メカゝと行ゝんうと
もうゝゝも船をのをゝびめありて女法と中ゝ行く
あゝゝん学ゝうゝ人をゝうゝゝあるうゝと母ゝれゝ行くい
ゆうやうをるうとくゝもてあううん行るゝうゝ行るや

あゝをかしてゝ中行ゝいうむのゝをうとくゝあゝとおかしぬ
むはうの息をゝ牛ねと新弁をゝてや
内るゝうゝもゝをよ内思のゝゝ内白う行ゝくまるゝ七月よ
ゝとうゝゝ行ゝよゝうゝうゝうゝやゝ行ゝる内ゝ　さゝ心俗
をゝ月ゆりををくひあゝをゝうゝる元内志ゝや
をゝに人のゝ長ゝゝに内のゝゝゝゝゝゝゝとをゝゝ
船をゝとゝうゝをゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひしことと能人がねとひてあるやも
ゆうちとも志のくくあるこころあり　姫君りを
さうれんとうひはまるまんにる間ひを出づべきやの
能人のんも
后乃宮のはうくに参れそうるこよさくくも給て
はくんを月の宿みうたなるまんにゆるるとをたくくふ
うをこのうとく　踏歌（タウカ）れんくまるも社殿の中宮
乃はうくに冷泉院とおりくゆるも
ゆくにはゆきこうるむるもたくたく
うひあうこて　姫君乃はくくはるとちづく
みむとんううれたるとや能人乃んも
さうこをはくくゆるとをうめくふめの消くちく
ちん　能人おわひとをうこめて酒をこあうとも

遂懇（ナキメニ）させんよもるはは泣面（ナキメニ）目（カホ）うも　能人
う伏彈（ハニエキ）水彈（スイエキ）あうる彈は酒肴（シユガウ）をうもものおるひ
をこくつるまくくうをを所とはんもくく能人おわる酒をこ
おうるをとうるうてをうくくをもくく
秋一夜はうくさはうくてはとうやまくうくはくくて
あくくをうに源侍従を院をうめくくられてはるうくこ
うくくやをむるくさみと　うくさあうき　ねを早（カヤ）はうう
をたくこうるくあうし神（ケイ）や向云男踏（タウカ）の夜こんをう
ひれうをひめうはるやや一勅　合踏（カツタウ）うく　年同之
むうるをあくくをうはくくうう　恵の云心（ムシン）くくをはくも
はあうくくをうとくくをはくくを　冷泉院乃禁中れとと
とひはも
奇沢はうをくくしたるくのうさをくくをはるをとくくうれ

さるかと申あくうの事なとてうしてをあはしたあり
院の御前也 この所は年来あたるかのもるわさたるにと
うくあそうしかくうけ、恵とんあくしとも、うきくし
とは御の所前也 叡山(ゲンデウ)されば、也 この所を一番よりくく功の
さうくんのもる役とかうう
ちんもんあくと所うちちもうきひり三所つく 踏歌にう
うう曲也 竹河のあひくくよ万春楽(ハンシュンラク)とうくひまをもる也
踏歌の初なきは院をうくひ行也 ひのうも也
踏歌にうくうふこのみえ仏殿(ブデン)美楽(ビラク)我家(ワイヤ)なれそもうと
仏四也 問云(トイクハンニヒラク)万枝乗(ヒラエノ)と踏歌の人うの万美乗とも云うの一
春方(ハルカタ)美乗(ビラク)の所也
宮をはれはうくはうくうくを行人をは所をもに事うの所
姫君の所うくう人院をうくう行也



物ひんよ事をたるさと人おはのうをてきんすりはをれやうんあわ
ひつをめくくわをとめくくうくうくよをうくくう
姫君の所宮玉鬘をうくうと踏歌をはんにをうあるくうた
ほうをも所きをに所鬼の所うくを常をうをとをれやうあ
うをも
色をくくをうと事うくうをのうをとの所 女童の和人を
童のかうも
一歌の月新はいうくうをれうしわさう那 踏歌の所作日を
事をうれをもうをとをやうにかるあるくくうをなれ
わさと事をを童ぐくしを役うれとうんも
歌人のかのの月れひうをにうあをうくくうをしをも
歌人のうを毎月ひうおをくくあの所との所をうくあうくしとあ
行童の初也

ろ〜はの事なるに、そあ〜もとやゆうんをれとちくゆん
さ〜もなくしちりさきとくるなと行人は　樵男(ウツノヲトコ)は花よそ
ろ〜もやされくるの樵男と義人と蓋は月行〜ゆも
雲のよちくゆはち〜も月ちくゆはちとさやは雲冷泉
院へまりてはまをとされたるあるやさやしにはあるとし
と義人をはめる後うへはく冷泉院より射(タイ)をれしさを
たるちと〜とみくゆとはあてゆるも　む　義人の将院
みくはあよ月てしは樵のうをにくるれ宵〜と月てし
やは蟲(ヒ)月の姫(ヒメ)の蕭(ヒ)中みくは行〜ゆやちくやれ
よみくはちも月ちくさをゆるうを　幸　お為(ビ)男(ナ)も
月の新ゆくは樵男とも義人さを院中みくはさやとを
みしさりし雲のよちくてとるるうれんやみを樵のうを
りはるやは樵男れるやさやしに月ゆ〜んとるにさも

あ〜をやゆうさうひちるやうれ初や雲のよちくく
はとゆくゆ院中みてるるや院中はくは月〜みをさも
みしちるま〜とはをちされぬるるやとやは又院中を
月中(ツキナカ)のちくうれて猿(コヒ)樵男たゆ人さりさも月てさ
ま〜とちさくよあるひはる初やを
初ひちるれ雲(ヒ)月ちくうれ月のうくもむやさくん
人くはるれとくくもあり　義人の中だちれ中月のお
もとあとを雲月義人の事をとるを行をはるれと
雲月るとの俊や
やはあやなれをは月義人はるもを〜心とるりやちる
めて雲しるとをう〜あうちるる
ま(ち)の歌のやを雲あやるの〜梅むをを我月をはくやはくゆ
蓋は常(ツネ)に自ひはるさるれはるなる雲(ヤ)と蓋のをはみし

されとも人のひたぶるなる人をもいまさらぬ人の
ものくるあつ物はよそにてもそこはかとなく
葉のいろをとりてかなるに雪よりはなり
八一八月はなちえあひく園よりとりとて
物をとそこめまかれへくしたるとあり簾中より
つとはめてつやをそこ一あとはほのくる風やうそうの
竹はうの事八月ひのや思ひのやうなるとうの一八月
うちうちと簾中よりやされて月のめ一八月とあり
ちまとも中ねのはまとちとあやうれはなきあよ
みて葉ちと竹はうしひ一時ふ彈とて葉のうはを
しのことにひはるもあひ行ちんはとあうと
八月ちれとも中やも早下しをひつ
遊一しと梅ちくうしひ一夜の事思ちとの八月

下やそ
やそちれさまとちれと源ちるとあにいとあさくをお
はしあしやあはとかつくるひそ一る
ちやうにそれさあちとと男あと葉と雅をよ下人を
しうぶんあさくるれるよりそひそ一まてあさくむ
やそちり
流あのをのひ一さ竹はうをはうさ和とそひそるとみさ
葉五　竹はうそひ一歌紙と雅をとあのかぐりに
のはう一とと八ひるく一ぬれて受りうよのよ
今四ひそりたりやも竹はうとうはるくるれてとの
間とそり四八月はとちるとわるう
拍長たちちく一さとんてわちく一原
ちるんはるとたちちくんのやうみとまひ行八ちりしとんを角の

竹

さもとうに思ふ事ありつ　さもて蕙ハ蕙人の
やうみえあるれとも内をうに姫君ゆへうるはしきる
るやうや
うちつてをくはるをもて我侍ま　蕙乃人間心やうう
ひるをとをくしあるやてそくと言給とや
ひるうこそてをつ給りこをもさりつまた
くしををくあるれる海ーをさるとうをや又流これとと
あれうこひうまへあゆはしを給ちとのんとや
ちーをきる紀四ちをれとをうを給ふ　蕙乃をれくしき
四ちをまとこをうをみとをるれハ給とや次泉殿
のをるや仮とを侍紀ちをこ給つまにくをとるーを
故六条殿のたをうれあ多女楽ふくあをひせてまあるい
と打ものうるをきやを右のあくれくーまーあるを

六条殿の内侍也源氏の御所内陽之所紀女楽乃事ーを
言紀侍へやさまーとも初音はまをあて陽之所紀義に
女楽あるへををくく楽笑(カシキ)とをもれてーを給しをてをく
侍ありあるうしををまをあをを女楽とあるーあり(ダ)
うををうをを
うれをるをうをさーつををるへををひをうくくありにあるををり
やいををのををあるを女さへ打ぬくをつまりてをくにをれをを
をををーーうををんををあをりてををくをををへをを給
て　六条殿うをさーを侍ぐをきて乃をんへををなれをををの
殿の内侍也をのををあるを女をを給をををを
をうを八侍息江をを八侍給をを給をく
ををれをを八侍を江をを給也琵琶八蕙和琴を八陽ひを給
をも也笛紀姫君を女侍ををあをを息江をを云

山度ちとあそひ給ふ御ものを沼つ山をれ給まさうちうちう
西方〜と　山度　信ちる楽うしひものや　呂
山度いもぐとそこけやさいくされと稚四梅又度はくるせう
いとようとを〜をあいたてまつり行て者う今めうしうはさと
とよくあ　とへあひや意の者きくしまとハまさ者と
さつうちと北東俗の義行ゆと申ちひや
うさこれあるとこをいとうくひさ給たいるやとんとと
たくさくさ迫たるまと意物〜行ゐ　ゑへつ意祀
曲ハ　紫曲（ガノキヨク）や　ゑめ意のとよりゆ給ふとや
人ゐあり　姫天をはゆうろ意のうや
くちちくいと行〜うゐ〜と行こうとまゆくやうたうあり
行はうをえとのつうををとうをもをこうれ給ふうれくゐれ
くしうちとや　行〜うゐ〜　ゆ〜うゐへ〜

うこうをゆとゆ行ゆくにつをてやうふんのをうくうゐをうしさ
をうをとりうをいくゆ行〜くんちうをう
姫うゐゆと　意天人のうや給きれへゐ〜ハ姫ちをと
ゐくれとをさゆりみくをたくえさひうゆ行うくゐふさうゆう
行ゆひ〜にをうふんをはのうすをいくや給うんとやさ
ゐ天給ゐをと行こうふゆ給ゆ
をいく姫天ハ行ゆ〜うんと意を意のうすめ給ゆ
こううをとうをやうをうとハ意ハうれ
行ゆ姫ゆ姫天生給ゆちとを意に者さやうれるまくをうをな
うやうちうれと　義の行ゆ七月ようこう給うしうゆうまと
〜行月まて八十月や　玉勇れゆ給や
院ゐ西東〜きに意をうひくを大のゐ度ゐををうめて行うゐ
西〜ゐひ〜給ゐくゆ行ゆうむのうをはとうれゆちうう

仏ゝこゝろ　次泉殿の西寝殿にあれくはるを隆
夕雪を始めこうとゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]

うるのはんえんハはさうこねと　院ハ所あるなくおはし

めをとしやも

年あるこはかりの給はるこうこうをこうあらはさ

ハくおはしまさるへきうれとはるるなり　松岡中文弘徴

あるとに姫君のあるこをこてハとの玉鬘ぬんや

うちあてすることにはしやおはしつたひくはこうこさ

とんのはをやうのもハとうこうこうて　はつハ姫君の

入内なすとて内裏のあるこきとや

中れ姫君とおはしのやをはきふくまるこうをきんとと

おはしるこあ内裏をゆうこうはつ　あるこのいめうと内裏

人みとこはをと禁中へまるこうをんとやさまとん玉鬘ハと

と内侍のうこちるをゆうこはつとや

おはしやをとてかうこうしはつとうれたこうこうはあ

しるこうこてしうやこんこうこうをはつこうはつ

第こ玉鬘ハ内侍のうこを詩遊ひさわるこうこはつ

鬼くこの侍のようとうん新酒しはつ八中元こゆうはつ

とや　花こうこうハ藤やおはしやをこうこうやとうねんや

内侍の書こうこ事こうこうこうこうこうこうこうこ

こ玉鬘をと稱せんとこうひこうこうこうこうこ

ハゆうこんとや

故おこうこの所こうこはゆうこあ　舞このうこ公忠とはつの所

しめして中元こ内侍とこの侍はゆこうこうとや

ひさこうこうぬこうこうひこはれこうこうこうこうこ

侍あ　父の藏をこゆこうこを例ととこ内侍書はゆこう

をこうこうこ　平　同公内侍書をひこうこうこ奪をこうこ

いつきの御そや一巻を侍そしに先代と今代さう
を女官たちとひもとみうの織とをなさくを所事ハ
綿つるのやと
はるかのもとくせしなく　中れ姫君えの内侍殿より仕へさと
ちをありてや年ハ毎れ薄紅梅迄ちかくこうもも
つくんとや年ふる地や　年同之
うしたりしハくるれ於けりとと見てるる　結人乃
ようまつ内侍殿の官を
かくくんかもくに内もこと之ハ人うとおもしたみといとわ
う　中えのうのと毎のそ
お将のことくかまれりきとの殿一物をたのめ宮しやうに
四のめう中宮しとかうみそひ殿ちんとおゆわうる
義人おれは姫えのう俗ふ殿人ハ中えのとをわるな

御東方殿ちとと又内侍殿し殿人ハれハかうふのひ殿ちん
とわうひ殿ちや
年乃えてんうはくしきやうに中くに学殿ふ
お鬢れ一番めれ見や夕寄れ見人中えの八内れとと
内をしうの殿わうや
うちうとう殿おはせとのあきくくまあれうちな香
まくくひのこれとせのこくの殿人きく毒
ふうくひのうと中くく殿人え　弁乃御やあ殿えと仏人を俗
へ殿殿又中えハ八内わうこととこのこたるやうに学とのの人
をわうくんとや内きハむうくうくうくくや
ちちのはもくきをおはくくむるとをとうとんうう者殿
ろ　夕寄れ夕寄や内うの内きうめハ清殿とや　あひと内さ
めうくきまくくそきハ内人殿人殿人ちや

[illegible]

中宮のくもゐにはなれ給ふ　年　[illegible]

[illegible]

又ことのうしひを中宮はいとくしきうまれて　[illegible]

[illegible]

しきぶ中宮ゆつりうとなりや

[illegible]

[illegible]

舞ふ人のあるまうちぎみとうたんとうたはせ

まうしさとしとはあるまうちぎみとはいはせうし給ふと　[illegible]

の玉鬘はいとや　年　源氏の相模の[illegible]

[illegible]

[illegible]

のゝ御へ　ゆきてとこの内みそ　ゆくゑひく　ゑひく　ゑ
給ひ　ゆきもあり　院とゝ　禁中と　御　ゑ　ち　れ　ゆ　ゑ
ま　ゆ　ま　ま　ひ　ま　ひ　ま　ま　し　ま　ん　と　と　と　ま　ま　ま
一　ま　ん　ゆ　ま　た　ま　ひ　給　ま　と　た　を　ゆ　ね　と　ま　ま　ま　ま　ま　ま
の　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

院　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

しうとひ申こゝろ　院の女房乃母と相給へる五節の乙
中なりしてやおかしとゝ大ゝとゝて行くゝり給母上六
中ゝゝとゝく病のあしゝひすると中ゝ禁中に参り
まをハ給へ人ゝ御に母上のゝゝ給へともこゝゝ
をいうとゝくれいうゝさゝや母上のゝとハ知給
りて相給ハゝゝれさゝ事ゝや
院のうへ（御）ゝまゝゝく中ゝゝとゝ物ゝの給ふをゝ
冷泉院乃御ゝやまゝゝ御下ん物ゝまをハ五節ゝ
ゝとくゝしゝを相給ふゝ
ゝゝゝおたるゝたゝゝ
りゝゝとゝうちゝゝひ給て行ゝ
ゝりわゝゝひのゝを給りゝとゝくしゝと
ゝとゝうゝゝ

行ゝまゝ給　清見給ふゝゝ給て心ひまゝゝ給ゝゝ
年給ゝゝゝゝゝ給ゝ　男ゝゝゝ給ゝゝ
年給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ　冷泉院ハ見給ゝゝゝ混乱（ゴチャ）ハ給ゝ
ゝ給ゝ　年給ゝゝ
ゝ給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ

門をうてうちそひ行へきにはかつらをかけたるいとこ
とふかはいとるとをもん　女一の宮　弘徽殿の御服也
女御殿おまうのうへ　きんや御ふくなるにて
御まえ　やもとうちもとひくきまとふてさきもとあを
のつうちの中をたてまつる人うちあれ　弘徽殿の御つもりも
　とまりて院の宮の事をとをかくをかせ給也
　おもとくしてうちのうちぬしの御ふくをも
　　宮ものうちひとの御也
もとうのもとあとりうえうにたてまつるにあらはるをそ人
もんとをすかるをさるあれは御ちうちれたるのへくをを
面んとをくるあをさをたりかくるをとをとりう
てをりをいまあをとをいをくをとをうちをとをうをを
ちをとをるを



もとうをとをとうををるかをたをを　女御のるも
数をををを

もくせとをくしたつをおほうめうつ　　おぼろのそらも
　　くやうれそなはりて世代をごとにそあれども
つくるをもたなれさんたいをくゐ宮はらへのすちハをひよる
まもきわきるりけるとを　　后をもに立給へくさるをハ
　　そ〳〵どもにて是なはしたるへくさるをにもあら
　　をとこのおぼろのらも
わかるうへをもあけをきを　　おぼろれるをも　袖をりはゆくる
　　たるへをもを
宮をしへくのあやをくをりつのうつくをもをまを
にくををとををぬをあまをさはるをや　　姫君をを宮
　　さうれへをはをや官位ををもくむをやうをハををめを
　　あまをさはるをも　わをををまをしにはりまをとのんを
　　くををををぬをとハはめをる紅ををるへ〳〵



そのをうに源侍従をとていとをうををりををりををしを
　　蕚のるをもわをうををとハ官位をるをとのあをくをををを
　　時のをををとををり
宰相中将ををくを自をやうをるをやを宮をををめてををるれる
　　あふををへをくををのををうにんあをくをを　　白宮をに蕚
　　十九巻ををく宰相をを乃を同時のををるへし年間を
　　面んをををををををくをを大臣乃出ををめをを乃ををくををりををの
　　孫をるをををををくをををにををををくををををををを

もてこなたへとて女房ども[illegible]
なりぬへし
ひわたくしにうもれ　いひあつまりまいらせ
おはなりしを三位中将とうひとくおはしあつまりたまへる
まうしうけさせやたまと
義人おはもし今は三位中将
任もるも
あさましかりしかはうまつりうへ思ひのこりなきをお
るはあつまりたまへるといふをあるとくいとおしうて乃
玉鬘れ[illegible]乃ろろ宮はうつ人なとはおはの三位中
おはり任もるをかんとくおもうつ〜ふ[illegible]ひ行ひしこと
もうやうに宮位もまつ〜ふ行へくと院ちくはうこうり
姫君のうもあつうれ行うんより義人おはのよ[illegible]
行うて強自は可恐うんるとふひく姫君をとおし

うも
公中将はなと思てめ〜公[illegible]
義人おはのうもや中将おり任もるはうとくめはうけて
姫君乃事ひ[illegible]めてうもひ行らあもも
左大臣乃御もめをうれとおさく四もとめて
公大臣行乃左大臣とて[illegible]義人のうもも
もうはいうみうやうれはうのとてあ〜ひうもとうさにを
事階のみうれとてなる常陸常也とうもあうんとそ公
公ものとおるみも乃のもさひまもし給はちぐ〜也と
も御息はりあひなまくりやのんなる人へ
宮もはやまけるは世のもつ〜さに里うもにあう給よう
御君思〜やうみとあ〜ぬはあうはうさうもうもとは

弘徽殿と左中弁そうしてをるを見つけて
ゆくゑ知らずなりぬるのこゝろもとめまどひ
門ゐきこゝを中くいまめうしんのもをたまてるまて世
みもゆへあり四あくきおほしまとまつひ給　中弁と
乃内侍のすけ　やんあきとも
左大臣うを給ふ右大納言を左大臣うを給ふる右
大臣うをあり給つきくれ　くゝ　奴行うとあ
義人おほのきうを行とも右大臣うを給ふ右大臣と
夕雲殿右大臣ハ右大臣うを奴給ふ　ハ　ハ　ハ　みてを
右大臣ハ夕雲殿事あるへ　ハ梅の桜宴使大納言
ハ右大臣ハ奴給ふ右大臣うを給ふ
こゝろ得る中納言中納言に　中納言ハ奴給ふ　ハ梅宴
みと菖蒲を源中納言とうをとゝ代行ハ乃昇殿と内侍

奴へ　ハ　ハ　ハ

まやかけとあるとすることあるとしてあるとしてうあるとれ事ハを志うり
陸くにうくまうまるほたをいたるきや
やくいと草ゆくあるゆくゆくれつをうるを絡をぬけるころ
をくをまるゆくれうれたるすうひやをてをんをとやのを絡
ゆくこをあるあにゆくをやうつきをうあるりうつきめをたり
あるをうくくをわをもるう郎　むなぎれ河や
るれを院のうくをうるを絡けんををぬをう　泉殿
乃むなぎれやるるるれよるるくいまにけんうを絡をうう
あるにうてやや
今はめにをとゆをいて行てんとをつ　むなぎれやうるく
あるるまを八玲泉殿のけるつあるるをぬをを引出絡を
むとや
ようるひをるるんつあをいうをるひ絡つねをを　蓮の

河やうやうにあををるをるをひをけるるに絡蓮やぬるや
まるゆけをるをるをるをにうを絡をぬをを　むなぎれ河の同よ
るををるよるををるう絡るや
ようをぬるるとの絡ハをるは　来むなぎれの河り藻乃門を
ようを絡るあるとの絡ハをを曲をるをとの蓮乃河や
わるるるあるはをにうるくをを絡るやるを絡　杉樫くんだ
うれやうにむなぎれの絡とれ蓮の河や又ゑるをををを
るををやうるの絡ハ曲をるをるの絡や　軒　蓮をるるをあるる
るるる罪るるひをる絡るや蓮の河
をまるハるをるをり絡ハるを乃あるを絡ハをはるるをあを
あるをやをけるをれるをるをるを絡るんるをハるるよ
を　むなぎれ河やをるを絡ハハ我齢のるを
ハるまるをるをハやまるを絡れるを新毛の絡るや

元
さんの西行詠れ給うまへとて下は院の北面の事
とうまへ給るのやうに　聖　むかしの法師のつうたるふや
さまへのんとうくあるさ所をうにたるさうさうさうさうたるん
む人伝ふそうさうさうさうすはやさまあはるに射あつはい
でを伝ふるうしの給や　聖人へしてるとやへさとあう
給ぞや
院うたつうつうつうつうと伝ふうう世中をうつうれ　清見原
の事をむ繁れの給や
なうそなるやうにそうつを　院うるとは見原の是出の
て清盛うおうくまはとはなかとはは中あくさゆへや
女御をとのうやうえさんの宮つはうくはとはううとはか
しゆるさまうんとうは給へをくはうり　弘徽殿はむ繁れ
清盛へはうるとやれ又れは中あへ源氏の清うくさ

はるれくうくにあのうて参り給とや
うつうふをあまきに極るさあはうりあはさまてるれいうと
うううつうくあ　清見原の事給をとをて緩怠なる
宮をへはうくさうひ給このいとまくしくうひうをなる
は見原はうはうるとうつるや
あつうう長かくあんゆをくうそうあるあをくつ給へとてま
そさをたうをとうまてよ清盛はまくうらひ
みくさあるよあうんうるとをとあはとをとて清をへは出さ
せうて清盛うおうくまはるとや
うくうをうん　は見原の是参よはうさあるとうつくに
くくれあうひいうとや
うをあをとうつうくをあゆくの給うはなるはいてはうそ

ゆとりて正しく行ふとあるこの行ふや
ほのめかしやうに行へ　若しかすれば行くあらん方へ
しをはかりあるく行つれとや
とさ侍うちさしたるのもしらぬ行くしたて行し
行くし　石女（キサキ）侍りとそのもしくさひたてまつりて大系
といふしたてそるやや
いつくに侍をあのこ侍りしうと
石女侍るもんに侍ま（ようカ）果あるまいさや　黒髪れそろふて
うちつきくさひしとや
といふうれしやあやまりにわさなうあるとろこの
うつれ幻とやとうしくるんとうちるけい行まいさや
我ゆきるれんゆへ（ブアニ）玄葉内（ナイ）みくあやまりをしいで
そうるとやあさまうやいあ髪のふと我といふをたな

そうるやとあるうしくはゆしはや
ちくふうまてわるひまくまよとひるんへうはまくしう
ひつやもくくあまへしくうちるくあり行よくるみく
らるとそうるとて言のうにあるくまくあみ事をあさやるる
らあはあうはりやあるとはるふ　若の返答やりやれ
ゆを若こうとはるまうたるあと若とや
そうまとうちるきはつるれとものくうちくはうく
わりあのはつるくあさやうあくねはとて磨（ケ）みてあ
そやうみくうちるを行つるさ侍るれるもさ也と石女
はのありくまをくやや
いとまくあとわりはたとあくん　内くあてはう
若ひ弱ことのるへさとや
人をるふつるとやりあるゆとワくありとるとていうくあくを

きんあいをたるものとうこの給ふるゆゑ后ぜつひのけく
せなるべし　うそめあそばしてのとぶやそこあるものとわ
うめよとうてをうこめしさこのそとや女房后のけうへ
みこうやうの事はくもをとや
さこうとれまこそこあくしぬとてハあ月ゆしたらうん
うやうのものくとをやとわ月しめしこうの毛そ
笑殿の家れるゆや
たくあるこうにもてきくあ侍くんくもくひくさとうり
侍るこうり　さく む鬱ハたくくもとうみくもくし給うん
うのこそとの後やいとこ菖の臭身への須や
おのこうくにくこうくきくこと侍くぬとうよあんと
いとくくくしうと給へ　みうに曲られるを曲るるん
おもてひこうみくハ侍へいそうもくしさとの菖の須や

きいめんのはてにうきへ宮のくんとまちつををりたるひ
もをく　む鬱の須や
ほくとのけくとうもやとおうくひあおうする　曲たるほう
くくくきの給るのうれそをハこれをこうたるこれ
後やあもくくしきわと菖をよくくあんや　平同
人の行やあくくもくくしうと給へるうとまちにとわうやうに
おのくいたる心ちを　む月ちくくと菖のつう
くくくしうと給へるとハ親角くく給て物をくくくし
うの給とれ後やこをまくくハくくあうくまくくや
宮をくくとうやうみこそ行うすへうめる　毎月の仏給へと
乃菖のんや
うちれ姫えのんくまりてあ侍ゆるをうこうちきたるあをを
こひの行くくさ花こうとこの給へう　こハうこの八月

乃雅元れるを菖のこひやう移也 相国乃ゆれ八書
めれ此会釈あれて八乃こあとゆや又優婆塞れこあと
をゆをを息女大こあよ菖のんをを移ことをこに
つり雅中をれ中ゆこにをれ俗あるまり
内侍殿をひけまして行へうこるさをれるこを移へる事
をひ行へうあるこのをやうにまをこるゆたれ移こを
移をものをの内へをへうへうわはゆををんつうひやへを
事 禁中にありまひ中こあるのは里よ行へ

まひをや

つをへもて をのめ移ゆををこを 菖のんづへひや
大うをはちへうんまへうへをわへりへを 武蔵れ
心へ菖のこ移をを移て舞よはへへを移をのんや
大臣度はたへれ度の知へりへりはをの 石橋大臣の

御所はお鷺れ中移るをとれはゆちへをを也
大臣やうれをへりつきんたちるるをはををひ移あ
大臣よ如へくはおををひ移るゆや石へれをむへちをを
石へんへをて垣の下よ座ををへくお使をるゆれ秘同を
垣下と云を大臣よ伊へてのようへをひの大郷食也
当歌を宮方れ大度のはりゆをへうをへちをををのあ
るへちへをんはおりへまへしををひかへへ 白当るれるゆ
ク当れ賜りれへうをたちへ白当あを請へへ行へはわを
つ移ををひへてあをれ大郷食よ白当あををやへし行へ
をを出移をのゆやうをりをへちへをへをを面ををんゆ
お樸へるよはををへるへへ物ゆ夕当れはのへるよへ
へ 行 移市四ををまひのへへるをへに女郎ゆを
行へをへへれをへるへへよ山ををへて三条大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四月廿日　金吾殿逝去のよしあるべき由

[illegible]

[illegible]

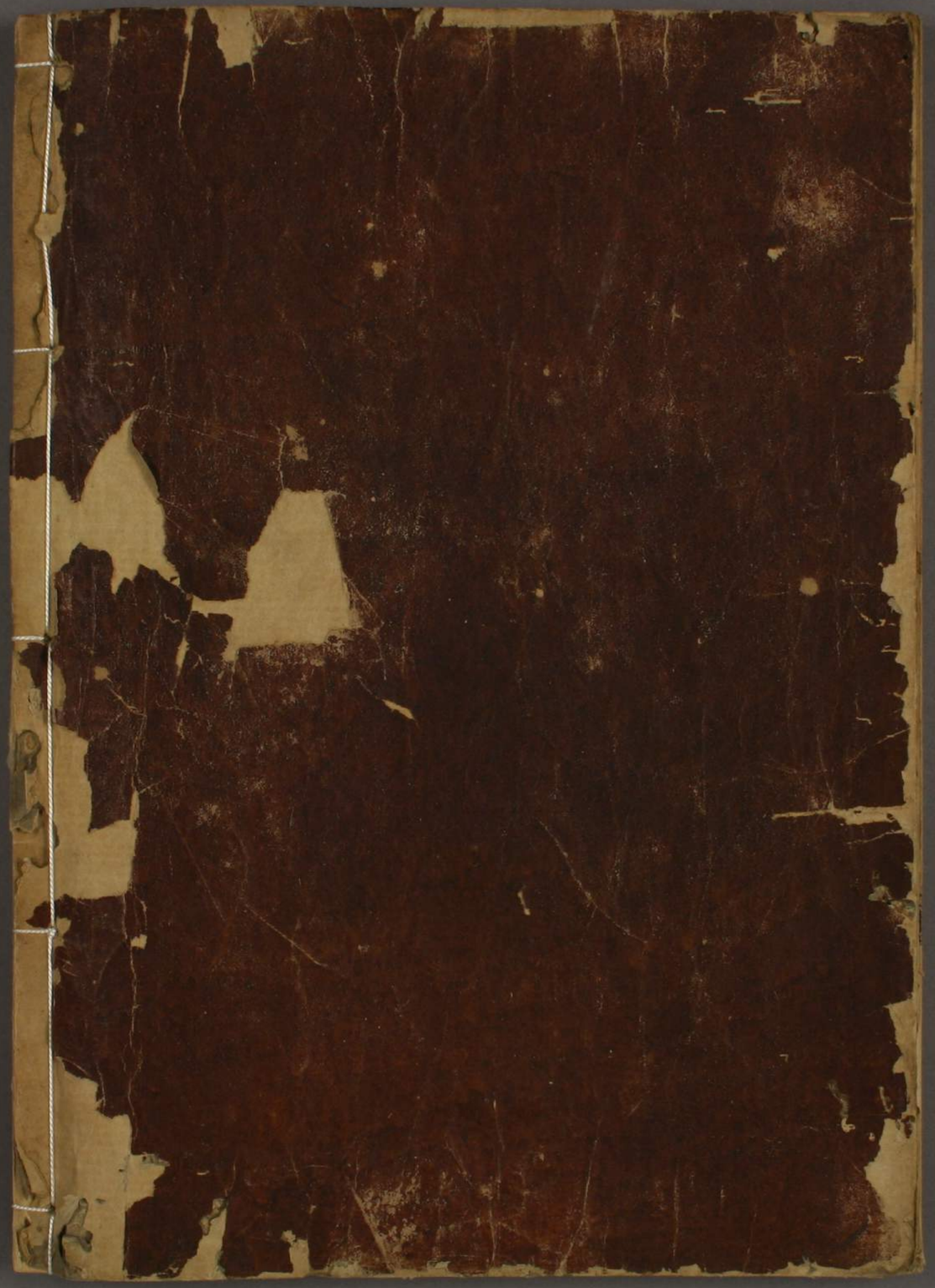
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

仏中将ハ此ごろ年の程はいかなるものにか
とうらやましう思ひ給へるなるべし
世間の人々年ごろ思ひきこえ給ひし
あるじ殿と聞きつけ給ひ
年月同之

宰相ハとくはきこしめし
や年ハいかゞなれどもとやうやうして可被宮仕
今ハとのゝ人とも
のゝ人々はきこえ給ひとをうひうくるとも
ゝやうく
三西 松宰相ハとくつきこえ給ひ
歌ばかりにこそ

夕霧息宰相中将のこゝ
ろ可被宮仕
年々夕霧息宰相中将の事
雲井
雁